沖縄民政府立博物館の模造作品からみる戦後紅型の復興
― どのようにして模造は可能となったのか ―

與那嶺 一子

A study about the postwar Bingata revival examined from reproductions at the Okinawa Civil Government Museum
― How was reproduction possible？―

Ichiko YONAMINE

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要　第17号別刷
2024年3月15日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.17
March, 2024

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.），№17, pp. 71－80. 2024

沖縄民政府立博物館の模造作品からみる戦後紅型の復興
― どのようにして模造は可能となったのか ―

與那嶺 一子 [1)]

A study about the postwar Bingata revival examined from reproductions at the Okinawa Civil Government Museum
― How was reproduction possible？―

Ichiko YONAMINE [1)]

1．はじめに

沖縄戦後、沖縄の工芸が廃墟から復興していった話はよく知られており、紅型の再興については、既に「戦後のびんがたのあゆみ」（『沖縄県立博物館紀要第２号』1976）や「私の戦後史 城間栄喜」（『私の戦後史 第４集』1981）でまとめられている。それらは、戦後復興を支えた人々からの聞き取りを元に、紅型の材料をどのように集め、製作用具を整えたのか、また、製作の主体となる人材がどのように集まってきたのか等、当時を知る貴重な記録となっている。

しかし、戦後、過去の作例が失われたなかで、紅型の製作に当たり、何を参考とし、どのようなサポート体制があったのかという点について言及された研究は管見の限り見当たらない。紅型復興期に尽力された関係者は既に亡くなっており、詳細を明らかにすることは難しくなっているが、1952（昭和27）年に当館が購入した紅型の模造作品から、模造がどのようにして可能となったのか、という視点で今回は考察を試みた。

年号については、西暦（和歴）で示しているが、同じ年が以下に続く場合は西暦のみ記する。

2．作品購入の背景

当館の前身は、1945（昭和20）年８月に開館した米国軍政府沖縄陳列館（旧石川市東恩納）に始まり、翌年４月にこの施設は沖縄民政府立東恩納博物館へと名を変え沖縄民政府へ移譲される。1946（昭和21）年、収容所から戻った首里市民による収集活動は首里市立郷土博物館（1946年開館）へと実を結び、翌年沖縄民政府立首里博物館となるが、首里市汀良町にあった建物は老朽化しており、新館が望まれていた。首里市当蔵町に新館建設が始まり、ペルリ来琉百年を記念したペルリ記念館の併設により建物が完成する。沖縄民政府立東恩納博物館と合併し1953（昭和28）年沖縄民政府立博物館として開館する。1952（昭和27）年４月に琉球政府は発足するが博物館の名称が琉球政府立と変わるのは1955（昭和30）年になる。

当館の収蔵品台帳には1949（昭和24）年からの記録があり、1972（昭和47）年の復帰までに収集された染織品数の推移を整理したところ（染織の記録は1969（昭和44）年まで）、1953年の受け入れが最も多く、購入実績もその年にピークがある（表１、表２）。

戦災で多くの資料を失ったこともあり、1952年には八重山へ、1953年からは本土での収集活動を行い、展示資料の充実が図られている。紅型作品の模造も、このような収集活動の一環であったと思われる。

では、製作者側はどのような状況にあったのだろうか。

琉球王国時代から紅型を生業としていた知念績弘（1905–1993）は、1946（昭和21）年、疎開先の国頭から那覇市山下町へ引き上げている。城間榮喜（1908–1992）は佐世保で終戦を迎え、熊本に疎開

[1)] 沖縄県立博物館・美術館　〒900－0006　沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum ＆ Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900－0006, Japan

していた子ども達といっしょに1947（昭和22）年引き上げる。城間が廃墟となった首里を見て、紅型を再スタートさせたのは1948（昭和23）年のことである。知念もまた1949（昭和24）年、昼間は軍作業員をしながら、夜には紅型を始めていた。

布はメリケン粉の袋を解いたものを使い、型紙の材料はハトロン紙や油紙、地図などを代用した。小刀は金切りノコ、糊を引くためのヘラはレコード盤が再利用された。材料の殆どは米軍のゴミ捨て場から拾ったものだったと言う。色材は赤瓦（朱色）、夜光貝（白）、フクギは薪に使われて残った根から染液を得た（黄色）、その他米婦人から口紅（赤）をもらい、マラリヤの薬キニーネ（黄色）が使われた衣裳もある（うるま市立石川歴史民俗資料館）。

1948年、城間は首里市の徳里洋裁学校で１ケ月程紅型を指導した後、石川の洋裁学校でも紅型を教えている。1950年、伝統紅型保存会が結成され城間氏のもとに末吉安久、豊平良顕、外間正幸、名渡山愛順・千鶴子夫妻、大城晧也、大嶺政寛、大城貞成、屋宜元六、渡嘉敷貞子、仲本ヨシ子らが集い紅型を学ぶようになる。この会は琉球政府の補助を受けるため「紅型振興会」へと名称を変える。助成金は材料の購入や鎌倉芳太郎（1989−1983）が収集し保管していた型紙複写のための旅費、工房建築費用等に使われている。

鎌倉が収集した型紙は財団法人啓明会より1955年（びんがた型紙31枚）と1956年（びんがた型紙250枚とびんがた型紙300枚）に分けて琉球政府立博物館が購入している。

沖縄民政府立博物館が城間に作品の製作を依頼したのは1951年〜1952年頃である。当時の収蔵品には着物として展示公開できる紅型衣裳がなく、県内外での収集活動は始まったばかりで、購入予算が付くのは1953年以降となる。琉球の文化を示すにふさわしい作品を求めていた博物館側の意向と、城間が疎開先から戻り、紅型復興に意欲を持っていた時期と重なったことは幸いであった。

３．1952年に収蔵された模造作品の概要

失われたものを再現する事は「模造」または「復元」で示される。「模造」は「原物と見まがうように似せてつくること又その製品」、「復元」は「元の位置や姿にもどすこと」であり、「復原」は「建物などを最初の状態にもどすこと」となる。

当館では模造製作を2015（平成27）年以降「模造復元」（原資料を参考として可能な限り製作時の素材、色材、技法で製作することを意味する）という新しい言葉を使っているが、本稿では製作時点で何を原資料としたか不明なため当時の製作を「模造」と示すことにする。

当館が城間より購入した紅型衣裳は８領である。模造には、「素材の模造」「色材の模造」「技法の模造」「形態・形状の模造」「模様の模造」などがあるが、この８領は「模様の模造」として製作されたものと思われる。また。これらの作品は当館が模造目的として製作依頼した最初の作品でもある。その後も城間には日本民藝館所蔵品の模造を依頼している。その他、模造ではない城間の着物、幕、風呂敷などの新作も購入されている。

８領の作品は1952（昭和27）年３月７日に５領、６月25日に３領購入された。このように分けて納品された理由は定かではない。

８領とも単衣で、片面染である。基布は、木綿と苧麻の混紡（グンボウ）、薄地の絹布、裁断した外国産の厚地広幅木綿布（綾織り）も使われている（図１−７）。縫製は、琉服のようだが、形態や縫製など、細部に和服の要素がみられる（図１−２、図１−８）。袖付けには襠がなく、衽下がりが琉服より５㎝以上長く、和服に近い。衿は棒衿である。これらの作品には次の点に琉服の特徴がみられる。衿肩あきは狭く、袖口は広く開いている。前身頃は肩から裾にかけて広がり、琉服と和服の両方を知っている人が縫製したものと思われる。

８領とも、城間の創作柄ではなく、模様は古い作例を模していることは明らかだが、戦災で多くのモノ資料を失ったなかで、模様や彩色の再現は、伝統の技を身につけているとは言え、簡単なことではなく、何を参考としたのか、それを知ることは、戦後工芸の復興において重要なキーポイントと思われる。

４．どのようにして模造は可能となったのか

（１）考察する模造作品（白地貝飛鳥模様びんがた着物）の概要

1952年に購入した作品は８領だが、誌面に限りがあるため、１領を選び詳細をまとめることとした。

白地飛鳥模様びんがた着物は、1952年３月７日に購入した５領の内の一つである。

白地貝飛鳥模様びんがた着物（図１）

登記番号：316
寸法：丈132.5㎝　裄65.4㎝
素材：木綿（経緯ともにＺ撚り単糸）・綾織
　　厚手の広幅布を裁断して使用
　　布幅は35㎝（片方は裁ち目）
織の密度：経32本，緯20本／１㎝間
染色：型染（片面染）、前身頃裾からの一方型送り（後身頃は模様が逆転する）
型の種類：白地型
型の大きさ：大模様型
柄の大きさ：大柄
模様の構成：完結模様　二部模様構成

模様構成の分類方法は、『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵 鎌倉芳太郎資料集 第一巻 紅型型紙（一）』2002年を参考とした。以下に同じ。

模様：水草（藻）、貝（二枚貝・巻貝）、流水、鶴、鳥（小鳥）
彩色：水草（藻）　：黄、朱、臙脂色、藍色、墨
　　貝（二枚貝）：朱、灰色、墨（隈）、桃色、臙脂色（隈）
　　貝（巻貝）　：黄、桃色、赤（隈）、藍（隈）
　　流水：臙脂色
　　鶴　　：朱、黄、桃色、臙脂色、薄紫色、灰色、臙脂色（隈）、墨（隈）
　　小鳥　　：朱、灰色、臙脂色（隈）
形態・縫製：単衣、広袖だが袖付けに襠が無い。前幅（29.0）は後幅（31.5）より狭く、琉服にみられる同寸ではない。裾、袖口は三つ折り絎けされている。琉服は並み縫いでしまつする。また、衽下がりは20㎝と琉服と比較すると長い。衿幅は7.2㎝で棒衿である。前幅は肩から裾にかけて5.4㎝広がっており、琉服の特徴がみられる。

（２）模造作品の類例

当館には白地貝飛鳥模様びんがた着物の類例が２件（衣裳１件・裂１件）ある。また、沖縄県立芸術大学が所蔵する鎌倉芳太郎収集の紅型型紙には類似模様の型紙が２件ある。これらと模造作品との比較をまとめてみた。

沖縄県立博物館・美術館の所蔵品

類例１　白地鶴に千鳥貝藻文様衣裳（図２）

登記番号：998
寸法：丈125.0㎝（衿下に揚げ4.2㎝）裄62.5㎝
素材：苧麻（経緯ともにほとんど撚りのない単糸／縒り繋ぎ）・平織　布幅は35.5㎝
織の密度：経24本，緯18本／１㎝間
染色：型染（両面染）、肩山で型送りを反転させる型付け
型の種類：白地型
型の大きさ：大模様型
柄の大きさ：大柄
模様の構成：完結模様　一部模様構成
模様：水草（藻）、貝（二枚貝・巻貝）、流水、鶴、鳥（小鳥）、霞
形態・縫製：単衣、広袖で袖付けに襠がつく。前幅（33.3）と後幅（34.0）ほぼ同寸。裾は三つ折り並み縫いで、袖口は織り耳使いである。また、衽下がりは7.5㎝、衿肩あきは7.5㎝と和服と比較すると狭い。衿幅は約14㎝で表に返して着装する。前幅は肩から裾にかけて６㎝程広がる。衿下には4.2㎝の揚げがあり、揚げを解くと身丈は133.5㎝となる（図２−６）。
由来・来歴：この紅型衣裳は戦前に来沖した京都の呉服商ゑり萬の永田七郎（1983−1975／1932〜1943年に５回程来沖）が収集したもので、1953年６月にゑり萬の三代目当主永田万蔵（1882−1962）より寄贈されている。

類例２　木綿白地鶴に千鳥貝藻文様裂（衽部分）（図３）

登記番号：なし
寸法：縦65.0㎝　横（上4.0㎝　下16.8㎝）

素材：木綿（経緯ともにＺ撚り単糸）・平織　布幅は不明
織の密度：経28本，緯18本／１㎝間
染色：型染（両面染）
型の種類：白地型
型の大きさ：大模様型
柄の大きさ：大柄
模様の構成：完結模様　二部模様構成
模様：水草（藻）、貝（二枚貝・巻貝）、流水、鶴、鳥（小鳥）
形態・縫製：衽部分と思われる裂。下部は失われている。両面染であるため、上前身頃か、下前身頃かは不明。模様は下向きになっている。
由来・来歴：当館には受入年月日と来歴が不明な染織裂が多数ある。台紙貼り、アルバムに貼付されたものもあるが、切れ端のままも残る。
1946年３月首里市に文化部が設置され、首里市民を中心とした収集活動が始まる。テント小屋を廻り織物の裂地を集め、二冊の織物帳ができたと『沖縄県立博物館50年史』に語られており、このような収集活動の成果の一つと思われるが、この収集活動がいつまで続いていたか、これも不明である。

沖縄県立芸術大学所蔵の型紙
類例３　鶴貝流水鳥模様白地型紙（図４）
収蔵番号：1085
寸法：外寸（縦55.8㎝　横42.6㎝）
内寸（縦46.2㎝　横37.8㎝）
型の種類：白地型
型の大きさ：大模様型
柄の大きさ：大柄
模様の構成：完結模様　二部模様構成
模様：水草（藻）、貝（二枚貝・巻貝）、流水、鶴、鳥（小鳥）
銘　：下儀保村新垣

類例４　鶴貝流水鳥模様白地型紙（図５）
収蔵番号：1326
寸法：外寸（縦56.5㎝　横42.8㎝）
内寸（縦45.2㎝　横45.2㎝）
型の種類：白地型
型の大きさ：大模様型
柄の大きさ：大柄
模様の構成：完結模様　二部模様構成
模様：水草（藻）、貝（二枚貝・巻貝）、流水、鶴、鳥（小鳥）
銘　：なし

これらの類例は、城間の模造製作にどう関わるのだろうか。

類例１は、模造作品とは模様構成が異なっており、また模造作品購入後の翌年に寄贈されている。現在のように写真でのやり取りが難しい時代なので、類例１を参考としたとは考えにくい。

類例２は模造作品と模様構成は同じと思われるが、彩色が異なる。特に二枚貝の隈取りが模造作品と異なる。類例１と類例２の隅取りは同じである。この類例２の裂を城間が見ているなら、色使いや隈取りは、類例２に近いものになったと思われ、模造の時点でこの裂を見る機会はなかったと考えられる。

類例３，４は型紙であり、ほぼ同一柄だが、型紙の大きさが異なり、また個々の模様が若干異なる。

類例４の型紙の鶴の嘴が少し膨らんでおり（図５－２）、模造作品の鶴にその様子が見られる（図１－４）。模様が左右逆で分かりにくいが二枚貝と巻貝と水草の表現も類例４と模造作品が近い。城間がこの型紙を知っていた可能性が高い。

（３）どのようにして模造は可能となったのか
①図柄
城間は、戦後の紅型復興について、首里の博物館で勉強会が行われ、県外から届いた本などが図柄の参考になったと語っている。1952年の模造前に閲覧したと思われる書籍は、1950（昭和25）年に沖縄文化協会（東京：仲原善忠）と北米在沖復興連盟（北米：代表者仲村権五郎）より寄贈された『紅型』である。これは1928（昭和３）年東京及び京都の呉服店で開催された紅型の展覧会に出品された上里参治等の蒐集品を紹介したものである。村山耕花が編集し、岡田三郎助が校訂し、伊波譜猶が解題をま

とめ、木版刷りの紅型が36枚所収されている。しかし、この書籍には、模造作品と同じ作例はなく、この書籍は参考とされていない。

城間はまた、1942（昭和17）年大阪に持参した先祖伝来の型紙50枚が柳田米次郎（浮島丸の無線士）から返還されたことも紅型復興の後押しだったと話している。城間家に依頼しその型紙を探してもらったが、それがどれに当たるか不明との事であった。

1953年、城間らが結成した紅型振興会は琉球政府より数回に分けて補助金を得ている。その予算で鎌倉芳太郎が収集した型紙を大嶺政寛（画家／1910－1987）が複写して持ち帰った話は知られているが、1950～1954年の間のいつなのか定かではない。模造作品が類例４の型紙とほぼ同柄という事から、図柄はこれを元にしていることは明らかである。1952年以前に複写された型紙を城間は参考としたものと思われる。

②彩色・配色

染織品を模造する際、その彩色、配色は記憶だけでは再現できない。それについては城間も語っている。

では、模造作品の彩色と配色の参考としたものは何だったのだろうか。それはやはり、首里の博物館が1946年から収集していた裂だったのではないだろうか。それについて、金城昌太郎（沖縄県指定無形文化財「びん型」保持者／1939－　）が1955年頃の事として次のように話している。「博物館には紅型の裂があり、名渡山愛順先生（画家／1906－1970）に指導を受けて模写した。裂なので失われている線は想像しながら繋げた。」（2023（令和５）年11月５日聞き取り）

当時、色材は豊富ではなく、身近な材料を活用しており、かつての色を得ることはできなかったが、博物館に残る紅型裂の別の作例や個人的に収集した裂等を参考として配色し彩色したものと考えられる。

まとめ

戦災という不幸な出来事の後、どのようにして模造が可能となったのかを考えてみた。模造には、次のような事が必要となる。

①参考となる原資料、類例がある事
②模造が可能となる布帛、色材などを入手できる事
③模造が可能となる道具、用具を入手できる事
④模造することのできる技術者がいる事
⑤技術者の製作をサポートする場と者がいる事
⑥模像に係る予算がある事

染織の作品は戦禍により失われてしまい、紅型の復興には、戦前に沖縄を離れていた型紙や紅型作品が参考となった。また、市民によって寄せられた小さな端裂も重要であった。

紅型を染めるには基布が必要であり、1952年は紅型復興を決意した1947年当時より、県外から材料となる布帛が入手できるようになってきた頃になる。模造された作品には絹もみられるが厚地の広幅布や八重山でよく織られていた混紡も使われている。おそらく、代用品で作成していた道具もその頃には充実してきたものと思われる。

技術者（製作者）は前述の通り、王国時代から続く紺屋が紅型を再開しており、その他、新たな技術者が育成され始めていた。

文化財復興の場として、博物館施設が大きな役割を果たしていた事は重要なポイントである。博物館は県内外に散っていた染織品と関係情報の集まる場であり、それらを公開することで、紅型復興に貢献できたものと思われる。

また行政の予算的支援も不可欠である。1953年、琉球政府から得た補助金で鎌倉収集の型紙の写しを入手した事は、その後、博物館での購入に繋がり、紅型復興の大きな足がかりとなった。

戦後における無形文化財の復興について、今回のように記録を積み重ねることは、戦後の動きを知るだけでなく、沖縄の人々が文化をどのように捉えていたかを知ることになる。

現在、世界各地に紛争が拡大し、有形、無形の文化遺産が破壊される痛ましい状況が連日報道されている。戦後、私達が経験した記録は、沖縄に留まらず、今後、紛争地の文化財の復興にの一助になるものと考えている。

本稿をまとめるにあたり、城間勝美氏、金城昌太郎氏、永田一郎夫妻には貴重なお話をうかがう事ができた。また沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館からは鎌倉芳太郎資料写真の提供を受けた。記

してお礼申し上げる。

参考

渡名喜明「戦後のびんがたのあゆみ」『沖縄県立博物館紀要 第２号』沖縄県立博物館　1976年３月

「私の戦後史　城間栄喜（紅型染色家）」『私の戦後史 第４集』沖縄タイムス社　1981年７月

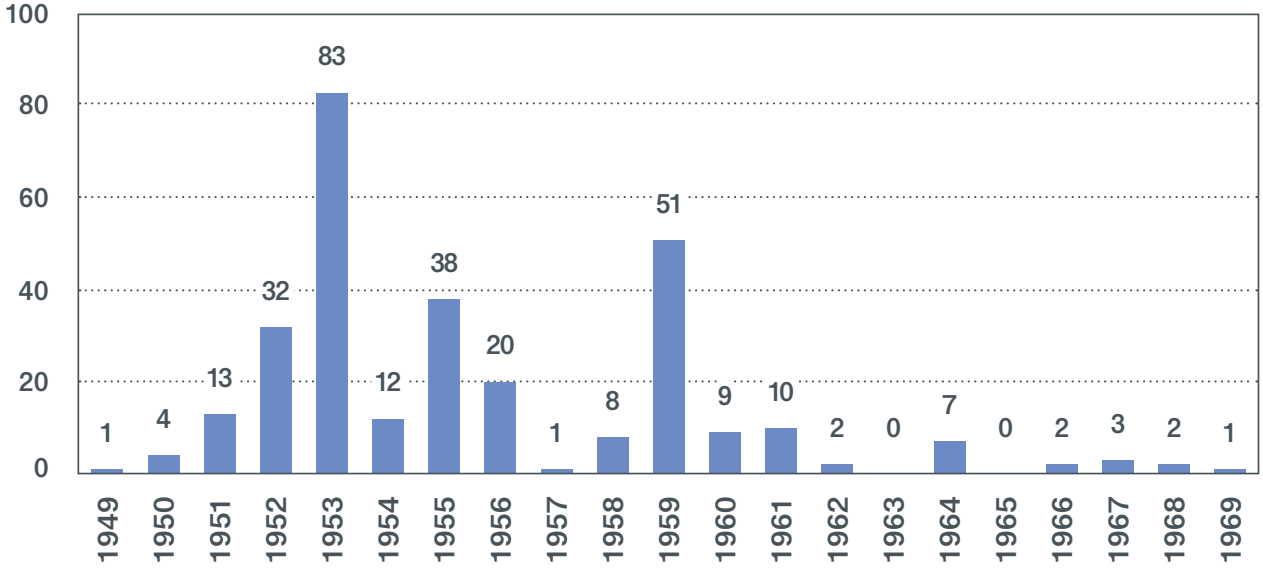
P142－143「博物館のあゆみ」『博物館展示ガイド』沖縄県立博物館・美術館　平成19年11月１日

P９－12「凡例」『沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵 鎌倉芳太郎資料集 第一巻 紅型型紙（一）』沖縄県立芸術大学附属研究所　2002年３月

P39－51「第１章 沖縄県立博物館50年の歩み」『沖縄県立博物館50年史』沖縄県立博物館　1996年12月

P53－69「第２章 資料収集活動」『沖縄県立博物館50年史』沖縄県立博物館　1996年12月

表１　沖縄県立博物館・美術館　染織品収蔵件数
（1949－1969）



収蔵件数（299件）　収蔵点数（1,020点）
1949年度～1958年度の10年間で、復帰までの21年間の71％を収蔵
1953年度・1955年度・1959年度に多くの寄贈、購入があり、染織コレクションの母体となる

表２　染織品受理次第の推移

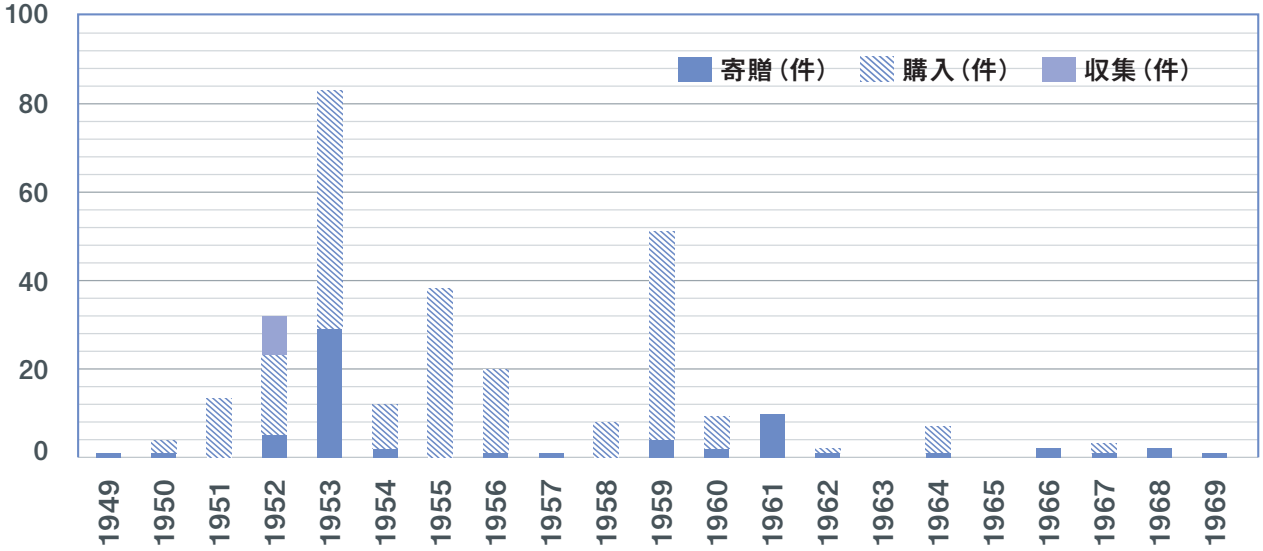


図１　白地貝飛鳥模様びんがた着物

図１－１

図１－２

図１－３

図１－４

図１－５

図１－６

図１－７

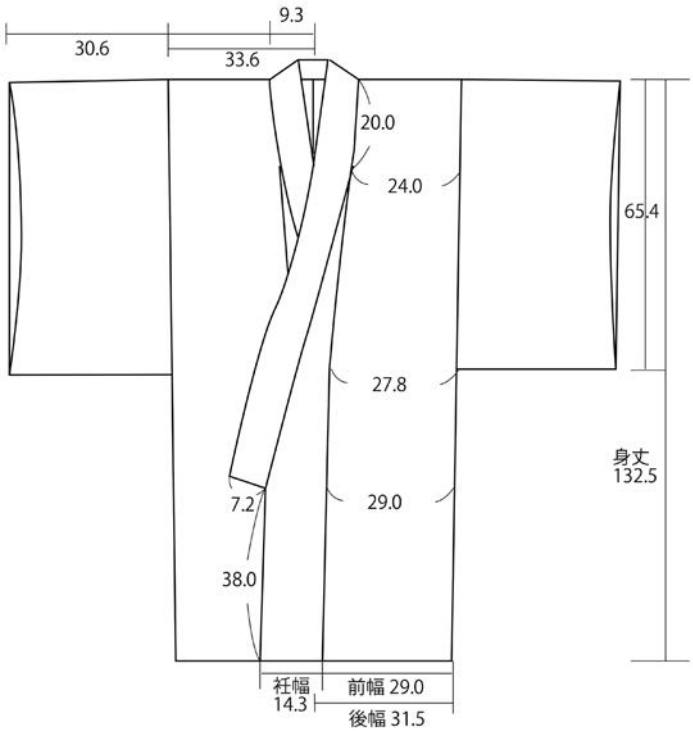


図１－８　白地貝飛鳥模様びんがた着物

図２　類例１ 白地鶴に千鳥貝藻文様衣裳

図２−１

図２−２

図２−３

図２−４

図２−５

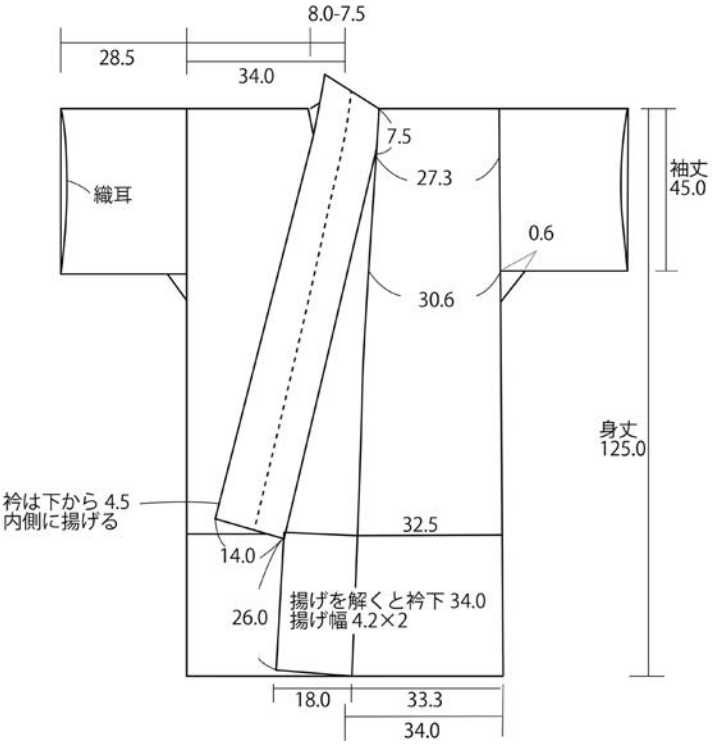


図２−６

図３　類例２　木綿白地鶴に千鳥貝藻文様裂（衽部分）

図３−１

図３−２

図３−３

図３−４

図３−５

図４　類例３　鶴貝流水鳥模様白地型紙（鎌倉芳太郎資料）

図４－１

図４－２

図４－３

図４－４

図５　類例４　鶴貝流水鳥模様白地型紙（鎌倉芳太郎資料）

図５－１

図５－２

図５－３

図５－４